特集

イベントリポート

第17回 思いやりそお市民祭

末吉栄楽公園グラウンドで11月9日・10日に開催されました。9日は風船のジローちゃん・市内こども園の園児によるお遊戯・芸能発表など。10日は松原のぶえさん・郷土芸能など盛りだくさんのステージが披露されました。またハンドメイド・バザー・飲食ブースなど約65店が出店。多くのお店が連なりました。

第31回 悠久の森ウォーキング大会

財部町の悠久の森で11月24日に開催されました。県内外から約800名が訪れ様々な植物を観察したり、写真を撮りながら往復7キロのコースを歩きました。もみじは赤く色づいている葉や、青く輝いている葉があり豊かな色彩を放っていました。参加者は森の中に流れる川のせせらぎや、新鮮な空気など悠久の森を五感で堪能しました。

住吉神社の流鏑馬

当たり的が多いほど翌年は豊年になると言われている末吉町住吉神社の流鏑馬。11月17日に行われました。今年の射手は末吉中3年の有川心花さん・末吉小6年の川本桜衣さん・末吉小5年の溝口文乃さん。3か所の的をめがけて矢を放ち、これを3回行います。有川さん7本・川本さん7本・溝口さん5本を的中させました。

第19回曽於市子どもフェスタ

～いってみよう！ "わくわくドキドキ "子どもフェスタ～

11月30日に末吉総合センターと末吉総合体育館で開催されました。今年のテーマは笠木小学校4年徳留朋輝さん考案の「いってみよう！“わくわくドキドキ”子どもフェスタ」。当日は約300人の子どもたちがそれぞれ楽しい時間を過ごしていました。

午前の部【少年の主張大会】

①少年の主張発表者のみなさん　②財部小学校金管バンドによる演奏　③青少年海外研修『シアトル』派遣事業発表
④青少年リーダー研修『屋久島』事業発表　⑤鶴岡市・曽於市友好都市間青少年交流事業発表

午後の部【わくわく体験コーナー】

①煙体験　②お肉クイズ　③そおワンダーランド　④食育コーナー
⑤茶道　⑥ニュースポーツコーナー　⑦おまわりさんになろう　⑧オリジナル缶バッジづくり
⑨影絵体験　⑩バスボムづくり　⑪バルーンアート　⑫おたのしみ抽選会

少年の主張大会

少年の主張大会には市内の小中学生の代表が出場し、学校・家庭・地域での経験や将来の夢などについて堂々と発表しました。

審査結果（敬称略）

【小学生の部】

●最優秀賞
「ぼくたちの運動会」
西園　健志　（大隅北小6年）

●優秀賞
「変えよう、自分を」
西別府　冬陽（中谷小6年）

●優良賞
「美しさを知っているから」
松山　星凪　（財部小6年）
「地方のさらなる発展を願って」
佐野　楓　（諏訪小6年）
「命を大切にする町へ」
白坂　愛瑠　（光神小6年）
「お父さんありがとう」
家入　凜歌　（笠木小6年）
「地球温暖化を防ぐために」
山野　萌花　（末吉小6年）

【中学生の部】

●最優秀賞
「死を乗り越えて」
郡山　愛優　（末吉中2年）

●優秀賞
「夢を持つこと」
上岡　雛那　（大隅中2年）
「強い風が吹いても」
末原　優菜　（財部中3年）

中学生の部【最優秀賞】

死を乗り越えて

末吉中学校　2年　**郡山　愛優**

私が小学1年生の時、わずか2歳の弟は亡くなりました。

私の弟は、重症複合免疫不全症、血小板減少性紫斑病という2つの病気を持っていました。その2つの病気は5万人に1人と10万人に1人という確率の病気です。幼かった私は、「病気を持っていてもずっと一緒にいられる」「いつかは治るだろう」と勝手に思っていました。

しかし、願いは届かず、小学1年生の冬休みに私の弟は亡くなりました。私にはどうすることもできない事実だと分かってはいても、「昨日までは元気だったのに」「もっと姉として何かしてあげられたのではないか」といろいろな感情があふれてきました。棺に入った弟を見たときに、「もう弟はこの世にいないのだ」という実感が初めてわき、涙があふれました。

私は、弟の死をきっかけに、自分自身や周りの人の命、そして関わりを大切にしたいと思って生きてきました。それと同時に「生きていることは決して当たり前ではない。だからこそ、このかけがえのない時間を大切にするべきなんだ」ということも考えるようになりました。

今、元気に生きている10代の若い私たち。常にそれを意識しながら日々の生活を送ることは難しいかもしれません。ましてや思春期や反抗期に突入していると、思っていないこともついロに出してしまうこともあります。それでも、私たちの身に「いつ」「何」が起こるかなんて誰にもわからない。それを踏まえると私たちの「当たり前」は奇跡に近いことなのだということをみなさんにも伝えたいです。そのことを心に留めて、人との関わり方や自分の生き方において後悔しないようにすることが大事なのではないでしょうか。

今、私には2歳の妹がいます。今でも弟が亡くなったのはとても悲しいし、一生忘れることができない出来事です。でも、妹が生まれてきてくれたからこそ、少しでも悲しみが乗り越えられました。妹が生まれてきてくれたことに私は感謝しています。だからこそ、亡くなった弟の分まで妹には姉としていろいろなことをしてあげたいし、共に思い出を積み重ねていきたいです。

そして、私自身もたった一度の人生を後悔しないように、自分の夢に向かって努力をしていきたいです。私は今、美容師になるという夢があります。この仕事は病気や障がいがある、ないに関わらず、どんな人でも笑顔にできる仕事だと思っています。夢を叶えるためにはまだまだしないといけない努力や壁があるかもしれません。でも天国で見守ってくれている弟に姉として頑張る姿をみせてあげたいです。

夢を持つことや、誰かの役に立ちたいと思えるのも生きているからこそできることであり、それはとても幸せなことではないでしょうか。今日ここで私の思いを聞いてくれているみなさんにも、これをきっかけにして、当たり前にある幸せにも目を向けてもらえれば、うれしく思います。

成長する姿を見られなかった弟。自分の夢を持つことすらできなかった弟。その大事な弟の分まで、私もたとえどんなに辛いことや大変なことがあっても、諦めずに最後まで頑張っていきたいと思います。そしてこれから先、自分の夢や目標を叶えながら、笑顔あふれる人生を送りたいと思います。

「お姉ちゃんは、るしくんの分まで頑張るよ。だから見守っていてね。」

天国で見てくれている弟に私の努力と思いが必ず届くように。

小学生の部【最優秀賞】

ぼくたちの運動会

大隅北小学校　6年　**西園　健志**

最高学年となったぼくは、5月の運動会で赤組団長をすることになった。団長として最初にしなければならないことは、「今年の応援合戦で何をするか」話し合いをまとめることだった。ぼくたちの学校では、応援合戦の種目があり、代々自分たちで演技内容を決めて、自分たちで練習をしていく。登校後の時間、昼休み、時々運動会練習として授業の中でも時間が配分される。応援団の演技指導は、先生ではなく、ぼくたち高学年の役割だ。そして、応援団長がそのまとめ役になる。

ぼくは、みんなをまとめてやっていけるのかとても不安だったが、そんな気持ちのまま応援団の練習初日がやってきた。3年生以上の赤組のみんなが教室に集まった。全員で9名、これからどう盛り上げていくのか心配だった。まず、みんなに、どんな応援をやりたいか聞いてみた。しかし、ひとつも提案が出てこなかった。家でひとつでもいいから考えてくるようにみんなに宿題を出した。出鼻をくじかれた思いだった。

ダンスが苦手なぼくは、その夜、去年までの応援演技を振り返り、少しアレンジして、提案することを考えた。ただ、それは去年の模倣でしかない。オリジナルな演技ではない。ぼくたちの応援演技とは言えない。でも、何も思い浮かばなかった。これでいいのかもやもやした気持ちのまま眠ってしまった。そして、次の日の朝を迎えた。みんなが集まり、ひとりずつ発表してもらった。するとどうだろう、5・6年生からアイデアがあがった。そして、それはとてもよかった。「アルプス一万尺」の曲にあわせた替え歌とダンスで楽しい応援になりそうだった。「これから始まる、赤組のこうげき…。」みんなで踊るダンスは、あまり難しいと下級生が踊れない。みんなのことを考え、少し簡単にした。ぼくは、団長だからといって自分ひとりで考え、自分だけで進めていくことを考えていた。でも、仲間に頼ることもあっていいのだと思った。ぼくの運動会ではなく、ぼくたちの運動会なのだ。さらに、そう思うことで、少し心が軽くなった。

することが決まったぼくたちは、演技をみがいていった。時には、意見がぶつかることもあった。集中できない下級生をまとめきれなかったり、段取りが悪く、団員に迷惑をかけたりすることもあった。頼りになる団長だったかはわからないが、ぼくは大きな声を出し、演技した。みんなの先頭に立ってぼくができる精一杯の演技を見せた。そうやってぼくは先頭に立とうと思った。毎日の練習の中で、みんなで相談したり、汗を流したりしたことで、赤組としてのチームワークも生まれた。

そして、本番当日、赤組は優勝した。「赤組の応援、とっても気合いが入っていたね。」と言われ、ぼくの一生の思い出になった。